加島信成、またの名を加島菱州

平瀬礼太

はじめに

つい最近国会図書館のデジタルコレクションがリニューアルした。以前より数段レベルアップしたのが瞭然であった。何しろ検索すると大量にデータが出てくる。有名な人物や事項だとかえって困るくらいである。以前『りずむ』でも取材した知る人ぞ知る「住喜与志」は結構独自で調べたつもりであったが、お蔭で新しい情報を入手できた。検索の弱点はあるにはあるにしても、基本的な調査ということを考えるとメリットは数倍である。今回のテーマはその恩恵に預かっている。

私の所属する東海地方の美術館で2023年4月から明治期を対象として展覧会を開催するため、事前に下調べをした段階であらわれた名前が加島菱州である。関西の洋画家として聞き覚えのある名前ではあったが、作品を見たこともなく、どんな人なのか、全くわからない。しかしちょっと調べてみると、名古屋もしくは岐阜に縁があることがすぐわかった。金子一夫『近代日本美術教育の研究　明治時代』という信頼のおける基本文献では、加島は信成という名前で岐阜県出身、日本画家池田小華の弟らしいこと、林翁と野村実之、若松常齢という人物が加島に西洋画を学んだことが記されていた。藤野彦次郎編『明治肖像録』（1898年　明治館161頁）には肖像写真もある（図1）。

大阪　加嶋信成君

次に見つけたのが192

2年の土屋弘伯毅『晩晴楼集』第5編の1[(1)]の下記の加島の伝記である。

「加島菱洲傳

加島信成。字子聲。号菱洲。尾張名古屋人。常喜漫遊。善篆刻及洋画。生五歳。㽞弱不能言。人以為唖。歳十一学武技。尤好御馬。身躯矯強。言談可聴。十三学篆。手写六書通一部。乙丑征長之役。尾張侯為総督。菱洲従軍有功。後与権貴論事不合。乃託跡於山水登臨。寄情於風月詩酒。徜遙自適。其至也。窮甚。売書画。以自活。熊谷酔香者。富書画。善鑑識。喜菱洲為人。延而客于已家。時菱洲従英人某。学洋画有所得。後為大阪中学画教師。其名頗顕。初菱洲戯刻小鼠。置之京師博物場。欧人一見。大賞其精巧。購以二十弗銀。其修洋画之志。発於此時。云篆刻遠取法於漢魏六朝。近倣明清諸家。別出機軸。高雅疎落猶其為人。今辞職市居。齢未至強仕。其技愈進不已（後略）」

加島は名古屋の人で尾張侯に従って従軍して功を挙げたこと、篆刻をよくし、洋画は英国人に学んで中学の画学教師を務めたことなどがわかる。

ここまでは早かったのだが、そこからは新聞記事などをちょこちょこ見かける程度で、あとは菱州館という画学校を設立したことがわかるくらいであった。大阪ではそれなりに有名な画家であったようだが、情報が少なく、東京横浜以外では珍しい洋画家としても、わざわざ取り上げるようなこともないかと考えた（もちろん、作品がないので展覧会の出品は論外である）。それが変わったのは大阪の図書館から教えていただいた、大阪電燈会社の設立に関わっている加島信成という人物はこの洋画と篆刻を嗜む菱州と同一人物ではないか、という情報であった。そういえば1880年の新聞記事で土居判事、清岡判事と富士山に登ったという、加島菱洲傳と比べて違和感のある内容から、変な知人もいるものだと思っていた。土居通夫といえば、大阪商業会議所会頭を22年間も務めた大阪財界の最有力者であったことは銅像の調査で知っていた。そしてひょっとしたら、とここで考えたのである。加島自身が実は変な人なのではないか、と。

様々な新聞記事や国会図書館のデータベース等を用いて加島に関する情報を調べた結果が本稿である。

油画師　加島菱洲

1847（弘化4）年9月生という加島の幼少の頃につ

いては『晩晴楼集』の「加島菱洲傳」くらいにしか情報は見当たらない。言葉が不自由であったが、武技、馬に長じ、篆刻を学び、というところである。１８７４（明治７）年11月７日『東京日日新聞』には加島菱洲などが「此道に勉励」とあり、この頃までには西洋画を学んでいたと推測される。洋画を英国人に教わる、といえばワーグマンが有名であるが、どうなのであろう。１８７５年には後に日本画家として大阪で名を馳せる深田直城が、父の友人だった加島に油画を学んだという。この年11月には京都東山で鳩居堂主人熊谷直孝追善煎茶会に参加したようで、翌年発行の『円山勝会図録』全三巻の巻下に加島信成「熊谷直孝肖像」が掲載されている。住所は上京区三十三組寺町姉小路鳩居堂同居となっており、京都に滞在していた時代である。１８７６年には富山県博覧会に《修学院離宮之圖油画》と《嵐山秋景ノ圖油画》が出品されているが、「西京加島信成筆」とあり、博物館備品とされている。翌年の第一回内国勧業博覧会の出品は《油画五畿名勝》で上京下本能寺前町の加島菱洲名によるものであった。しかし、１８７８（明治11）年12月11日の『教育新聞』（大阪教育社）には「先頃より菱洲加島信成といふ油畫の先生が當地でその業を始められて」とあり、この年のどこかで大阪に移ったと思われる。実際、１８７９年２月の『三府書画大家一覧表』（加藤富三郎編　前田喜兵衛版）では「油画　大阪加島菱洲」とある。

同年京都東山双林寺文阿弥において開かれた油絵展観目録の「展観出品表」中に《嵐山夏景》《酒井虎逸肖像》が記載され、５月23日『大阪朝日新聞』は「油畫にて有名なる加嶋信成君ハ一昨日師範学校兼中学校の書畫教師を拝命されました」あって５月21日に教師となったことが示される。『大阪府師範學校沿革史略』（大阪府師範学校編　１９０１年）によると、大阪府天王寺師範勤務となっている。さらに大阪東区高麗橋２丁目に菱洲館という学校を設立したという。ここまででは、西洋からの新技術である油画を学び、京阪地区でいち早く活動し、教鞭もとった油絵の先駆者の一人、というところである。

１８８０年には前述のように土居判事、清岡判事、高池三郎兵衛と共に富士山に登り、さらに福沢諭吉の提唱で創立した実業家社交団体である交詢社に入会しているが、こんなところが一般的な画家のイメージとの齟齬を感じたところである。一体何があったのであろうか。とはいえ、そ

の後も交詢会『交詢雑誌』の加島の肩書は油絵師もしくは油画家であり、『古今名家改正南画一覧』（１８８１年）では「大坂　兼油画　加島菱洲」となっていて、明治の洋画家によくあるように南画と油画を兼ねていたことがわかる。１８８１年の第二回内国勧業博覧会でも油画額を出品しており、この頃までの加島は油画を描く人物として認識されていたということである。

文人　加島信成（菱洲）

１８８２年に中国の画人で１８７７年以降度重ねて来日し、文人たちと交流したことで知られる王冶梅（おうやばい）の『冶梅画譜　人物冊』『冶梅蘭竹譜』の二冊に校閲者として関わる。『冶梅画譜　人物冊』では出版人として岐阜県士族加島信成と記されている。王は鳩居堂に寄寓していたとあり、加島も同様であったため、鳩居堂が接点であったのかもしれない。１８８３年には大阪の美術品輸入商・小西分史の一周忌展に際して『分史翁薦事圖録』を編む。また、6月に藤沢南岳、小原竹香、水越耕南、土井香國、近藤南洲、雲来上人ら漢学者、漢詩人たちとの詩文の会に参加している（『翰墨因縁　下』）。このあたりで急に文人的活動が増加していることが明白である。11月の住所は大坂江戸堀下通一丁目となっているが、翌１８８４年10月には東区今橋四丁目へ転居したようだ。因みに１８８６年9月には東区今橋三丁目へと転居を繰り返している。

１８８５年11月15日に行われた大阪博物場長三角有儀の追善式には加島菱洲名で演目「木曾最期、奈須與市」を琴で奏でている。１８８７年10月には、小野湖山、菊池三渓、五十川訒堂、小原竹香、藤澤南岳、日柳三舟と、11月には緒方南湫、菊池三渓、小原竹香、五十川訒堂、藤澤南岳、日柳三舟と集まった記録があるが、彼らは漢詩人、漢学者、儒者、教育者であり、王冶梅との交流も含め、中国的教養をもとに様々な文人たちと交流を深め、南画に漢詩に琴にと、典型的な文人を地で行っているのがわかる。岐阜県士族という記述があったが、１８８７年5月の尾張親睦会の幹事を務めており、東海地区の出自を意識していたことも判明する。

実業家　加島信成

一番驚きなのは加島の実業家としての顔である。『金城新報』１８８７年9月25日は藤田伝三郎、鴻池善右衛門、

住友吉左衛門、阿部彦太郎等が大坂電灯会社設立の出願を行ったが、加島が府会議員の豊田文三郎ら、その他有志五十余名と共に浪花電灯会社の設立を計画していると報じている。資本金は二十万円で半額は発起人が、残りは一般有志者の募集により負担することが記されている。この２つの会社設立の話は結局一本化したようで、12月に「大阪電燈会社」設立に向けた総会が開催され、発起人として藤田伝三郎、鴻池善右衛門、芝川又右衛門らとならんで加島信成も加わっている。翌年３月の役員会議で加島を支配人とすることが決定、１８９４年まで務めたようだ。その間の１８９３年に加島は宮崎彌三郎、村上嘉兵衛らの賛同を得て大阪電気鉄道株式会社設立誓願を行っている。これは残念ながら実現しなかったようだが、このこと自体が鉄道史では知られている事実のようである。１８９４年には国民道徳普及団体である日本弘道会の大阪市支会創立委員総代となる。１８９５年には玉江町（現在の中之島周辺）に大阪電燈株式会社が修繕工場を建設して加島に経営を委任し、加島電機工場と称して一般電気諸機械器具の製作に従事することとなった。１８９７年には同工場は大阪電燈株式会社の直轄工場となっている。少し戻って１８９６年４月の日本電気協会総会で加島は副会長に選ばれる。１８９８年１月には琵琶湖運河株式会社の発起人となり１８９９年には中外火災保険株式会社取締役、大阪瓦斯株式会社取締役、１９００年大阪馬車鉄道株式会社取締役就任と、まるで本物のバリバリの実業家である。その後も１９０７年に笠置水力紡績会社設立の発起人となり、日本鑽砥株式会社監査役も務めるが、同年11月には逝去したようだ。かの大阪ガスを始め様々な企業の創立、運営に関わり、積極的に事業を行った加島の実業家の姿がここにある。

おわりに

加島は多忙な実業家として活躍する一方で、文人との交流や文化的な活動も並行して続けていた。１８９３年には『梅花唱和集』を編集し、１９０３年には藤澤南岳の漢詩の末三字「文字香」を採って刻したという印を制作して、それが関西大学に遺されている。１９０６年11月には高谷宗範、田村太兵衛、村山龍平、上野理一、芝川又右衛門、本山彦一、藤澤南岳等と衰微しかけている書道の研究と奨励を図るために観鵞会を起し、１９０７年１月には雑誌『日清』に漢詩を寄せている。実業家としての側面を除い

て考えれば、琴棋書画に親しみ（囲碁を嗜んだかどうかはわからない）、中国由来の教養にどっぷりと浸かった明治ならではの文化人に思われる。いや、実業家が文化に親しむが故に、そもそも本来の意味で、つまり職業画家や職業文学者・音楽家とは異なるという意味での文人として生涯を全うしたとも言えるだろう。

最初に記した、加島信成・菱洲は実は変な人かもしれない、という見解は結局最後まで変らなかった。産業界の人物から見れば、出自が油画師ということはちょっと変であろうし、筆者のように美術の面から見れば、文化人たちとの交流は全く不思議のことではないが、産業界の重鎮として同時に活躍することは異様である。実際に筆者は、同姓同名の加島信成という人物がいるのではないかと今でも僅かな疑いを抱いているが、「大坂紳士の嗜好」という記事[(2)]で加島信成の嗜好が「油画」となっているところを見ると、益々別人物説は遠のいていく（因みに土居通夫は「朝風呂」）。明治期の美術家を調べてみると、様々な分野に首を突っ込むマルチタレントが多いことに気付かされてはいたが、加島に関しても相当のものだと感心するばかりである。筆者の関心としては、あとはデジタルライブラリーでは見ることのできない、加島描くところの明治初期関西発油彩画の実物をいくつか、きちんと見てみたい、というところである。

注

(1) 土屋弘伯毅　著『晩晴楼集』第5編1，高島大円，大正11．国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/926660（参照 2022-12-27）

(2) 『商業資料』2（2）、大阪経済社、1895-04、国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1542705（参照 2022-12-27）

※国会図書館デジタルコレクションを存分に活用させていただいた。また、大阪府立図書館には当方の細かい質問に答えていただいた。記して感謝の意を表する。

図版出典

図1　『明治肖像録』、明治館、1898　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1086063（参照 2022-12-27）